令和四年九月十日　於・十日町市笹山縄文館

第九回　縄文川柳全国大会

主　催　縄文川柳全国大会実行委員会

第九回縄文川柳全国大会を終えて

縄文川柳全国大会　実行委員長　大　熊　二　郎

コロナ禍の厳しい中、線を切らないように続けていくことを願いながら実行委員の皆さんと意見を交わし、今年も何とか選者の先生の協力のもとお題を決め、幅ひろい方々の（句）を募りましたところ、今までにない多くの応募をして頂きました。総句数一八六四句、ご高齢の方から小学生まで縄文時代の思いを込めて素晴らしい句が寄せられました。

縄文川柳大会の中に第八回目から全国という言葉を加えて頑張りました。おかげで今回は一般の部で四国香川県の方が大賞に、準賞には新潟、青森二名、岩手の方が入選しておりますし、ジュニアの部では小中学生の皆さんから素晴らしい句を寄せていただきました。他に北海道から九州まで多くの都道府県の皆さんに参加していただいたことに重ねて感謝いたします。

縄文土器の国宝に伴い手探りで始めた川柳大会ではありますが、立ち上げの時から取組んでくれた藤木悌次さんには本当にご苦労様でした。次回は第十回目の記念すべき大会にしたいと思っています。

第八回から銘打った縄文川柳全国大会の名のもとに川柳愛好家の皆様方に縄文の世界を深く理解いただき素晴らしい句が寄せられます事を期待しています。

何時ものことながら選者の松田先生、中沢先生には心から感謝申し上げます。

（追記）コロナ禍で表彰式が出来ませんでしたが第十回の記念大会は是非笹山遺跡の縄文館で開催したいと考えています。ご協力の程よろしくお願いいたします。

審美眼

一般の部　選者　松　田　て　い　こ

豊かな縄文遺跡が眠る十日町市中条の『笹山遺跡』。古代からの貴重で幽玄な贈り物を広く世に紹介したいと、地域の方々の熱い思いに始まった「縄文川柳大会」も、多くの皆様方のご協力を得て第九回目を迎える事となりました。コロナ禍と厳しい猛暑にも拘わらず、今年は例年を遥かに上回る作品数でした。総ての作品をこころ楽しく拝見し、沢山の感動を頂きました。課題「ひらく」は広い地平をもつ言葉であり、この度は特に豊かな発想に基づく作品が多かったように思います。

○開拓の凍土に置いてきた柱　　範子

○いつも見逃すキキョウのその瞬間　　らき

○棄てられぬ祖父が開いた千枚田　　英敏

○紙の本開く感覚恋しがり　　暁代

等々、心に沁みる作品が後を絶ちませんでしたが頁数の関係で総ての秀句を紹介できなかったことは残念です。

大自然への敬虔な祈りと共に暮した縄文時代の人々の、清らかな魂しいから生れた縄文土器は、何千年もの時を経て現代に蘇りました。初めて縄文土器に遭遇した故岡本太郎氏は驚愕し、弥生土器や埴輪を始まりとする「正統な日本の美術の伝統」をくつがえした。以後、縄文土器が美術書の巻頭を飾るようになり日本の美術史は書き換えられたと言う、岡本太郎の審美眼に感動するばかり。

人類の歴史は戦争の歴史ともいわれ、今も世界のあちこちで戦争が繰り返されています。戦争の無い社会を生み出した縄文時代には、現代人とは違う高い精神性や価値観があったのではないでしょうか。

○隙間から小さな夜の訪問者　　ていこ

ジュニア作品の選を担当して　　ジュニアの部　選者　中　沢　光　路

この度の第九回縄文川柳全国大会に、大勢の小・中学生の皆さんから投句を頂きました。どうも有り難うございました。今回は市内十校、五五〇余名というかつてない多数の応募で選考する側にとっては嬉しい悲鳴でしたが、素敵な作品も多く、ひとえに実行委員会の皆様のご協力のたまものと深く感じいっております。

課題は「みのり」でした。したがって果実の実り、稲や野菜などの稔り、が多かったのですが、「努力がみのる」と使われるように成果が上がる、という使いかたもありますから運動会、夏休み、の作品も課題に即したものと言えるでしょう。

縄文土器の作品が散見されました。縄文川柳大会ですから結構なのですが、すでに第九回ということで、今までに多くの作品が作られてきましたからどうしても類似句とか新鮮味に欠けることとなってしまいます。作者としては初めての作品でしょうが継続している大会ではその辺りも頭に入れておく必要があります。

課題を決める側の問題でもありそうです。

今後とも「川柳」に親しみながら楽しく作句して欲しいと願っています。

一般の部

課　題　「ひらく」　　松　田　て　い　こ　選

《縄文大賞》

竹の花母は天寿を全うす　　中條　徳翁　香川・高松市

長い開花周期から、その花を見た人は稀れだという神秘的な竹の花。人知れずすくすくと天へ伸び、或る日ひっそりと花を咲かせてその生涯を終るという。「天寿を全う」した亡母の姿に清冽な竹の生涯が重なる作者、愛と永訣の悲しみが匂うような美しい作品となった。

《準賞の一》

世界地図ひらくと戦火おさまらず　　菅沼　匠　　新潟・新潟市

平和ボケしそうな日々へ、突然あたまを殴られたような近隣国の戦争、その惨状に胸が痛む。その炎はどんな形で世界中に飛び火するのだろうか。生前、アインシュタインはインタビューに応えて「第三次世界大戦は分らないが、第四次大戦が起るとすれば、その時人間が用いる武器は石とこん棒だろう」と言ったという。想像するだけでも恐しい。

《準賞の二》

蝉しぐれ仏が半眼ひらくとき　　曽根　秀子　　香川・さぬき市

うだるような夏日の中で「蝉しぐれ」が一段と酷暑に拍車をかける。燃えるような蝉しぐれを私は大好きだが、ウルサイと感じる人もいるようだ。しかし古より豊かな自然と共に在った日本人は、自然の中に神を感じ仏を感じる深い感性を身につけている。この作品もまた、日本人特有の美しい感性から生れた作品であり、言い知れぬ懐かしさを覚える。

《準賞の三》

ひたすらに遮光土偶は春を見る　　三浦　友久　　青森・五所川原市

アニミズム溢れる土偶の奇妙な形は、百三十年も前から研究されてきたという、しかし最近、驚きの新説を提唱した研究者が現れた。それは、すべての土偶のモチーフは「食用としていた植物たちである」というものだった。いずれにしても、雪深い大地でひたすら春を待つ人々の気持が、遮光土偶のふしぎな姿から伝ってくる。

《準賞の四》

たとう紙の形見は母の紅型の　　滋野　さち　　青森・青森市

よほどのチャンスでもない限り、和服を着ることがほとんど無い日々となって、箪笥に眠る着物の虫干しさえ忘れがちである、この作品を拝見しハッと其のことを思い出した。たとう紙を開けばなつかしい亡母が匂い立ち、袖を通せば抱かれたような心地がする。美しいその紅型に作者は袖を通した事がおありなのだろうか。

《準賞の五》

リハビリの指はいっぽんずつひらく　　大畑　廣起　　岩手・盛岡市

ヒューマンな風を湛えて「指はいっぽんずつ」ひらいてゆく。この真摯な作品から、熱い命の鼓動が伝わってくるようです。連作となる次の一句「明日ひらく花の小さな息づかい」も可憐ないのちの詩であり、清新ににして命の尊厳に満ちた二作品に心からの感銘を覚える。

《秀　吟》

一　千年の阿弥陀如来の眼と交す　高橋　秀子　新潟・十日町市
二　開拓の凍土に置いてきた柱　坂　範子　石川・金沢市
三　父なのか五百羅漢の眼がひらく　大谷　晋一郎　香川・高松市
四　切り拓く大地に迫る温暖化　反り目　恋昇　新潟・津南町
五　歎異抄ひらけば風が凪いでくる　香川　遊　香川・坂出市
六　パンドラの箱開けたのはどなたです　渡邊　妥夫　茨城・つくば市
七　いつも見逃すキキョウのその瞬間　樹菊　らき　長野・伊那市
八　カーテンを開くとそこに瀬戸の海　須田　依利子　香川・高松市
九　絵本からぽにょっと人の芽明日の芽　岩崎　雪洲　青森・黒石市
十　本堂の厨子がひらいて夏祭り　小杉　軍平　新潟・十日町市
十一　むすんではひらき昔を恋しがる　山倉　洋子　新潟・五泉市
十二　裏木戸は開いたままの母でした　岩崎　眞里子　青森・黒石市
十三　戦端を開く悪魔のような人　船越　洋之　岡山・岡山市

十四　がまんして生きた証が今ひらく　小宮山　三次　新潟・十日町市
十五　棄てられぬ祖父が開いた千枚田　星野　英敏　新潟・新潟市
十六　全開の蛇口言い訳などしない　石倉　多美子　石川・金沢市
十七　やさしさが開く心の内扉　宮田　賢三　兵庫・加東市
十八　道拓く父の背中を追い掛ける　細江　隆一　岐阜・八百津町
十九　目を見張る生きる証しの土器土偶　有吉　一行　岡山・赤磐市
二十　アンギンが織物文化の幕あける　桾澤　英男　新潟・十日町市
二一　縄文は和の道しるべ今生きる　庭野　三省　新潟・十日町市
二二　未知の戸を軽々ひらく好奇心　河野　喜幸　東京・世田谷区
二三　他人行儀に開くＡＴＭの蓋　石川　鮎郎　新潟・柏崎市
二四　この道が人をひらいた歴史跡　丸山　健三　長野・伊那市
二五　パット開く派手な日傘は過去を抜け　広瀬　茂子　石川・川北町

《入　選》

一　自分史を開き優しい母に会う　塩津　誠治　岡山・岡山市
二　じょうもん館火焔土器が語りだす　中村　和星　新潟・長岡市
三　我が宝胸襟開き語る友　西川　勝二　新潟・十日町市
四　般若経ひらけば父が母がいる　山田　雅子　新潟・新潟市
五　見開くと縄文美人言われます　吉田　さをり　愛知・瀬戸市
六　パラソルをひらき大人の顔になる　櫛谷　暁廣　新潟・新潟市
七　ＡＩが拓く戦争のない国　髙橋　千賀子　兵庫・西宮市
八　胸の内ひらかせました聞き上手　木村　洋一　新潟・新潟市
九　紙の本開く感覚恋しがり　中村　暁代　岩手・花巻市
十　生ビール外すワイシャツ第一ボタン　中野　弘樹　埼玉・春日部市
十一　理不尽を受け止めてからひらく口　越川　智慧　石川・金沢市
十二　「サクラ咲く」報が未来の第一歩　椙澤　紀子　新潟・十日町市

十三　折り紙をひらけば孫のメッセージ　保坂　真遊実　新潟・十日町市
十四　寂聴の法話でとけた胸の刺　会田　修　新潟・新潟市
十五　雪に生き春待つ日々の冬を編む　宮　昭一　新潟・十日町市
十六　運命がひらく一度だけしかない好機　吉原　哲泉　香川・さぬき市
十七　道ひらく努力したもんおめでとう　岡田　恭代　大阪・八尾市
十八　絵本開くどっこいしょっと定位置に　細谷　美州子　香川・高松市
十九　はっとする扇子開いたやさしさに　樋熊　トミ子　新潟・十日町市
二十　未知のドア開く女の好奇心　川﨑　清子　香川・さぬき市
二一　恥ずかしさ捨てて男の差す日傘　幅　茂　愛知・名古屋市
二二　花火師の愛の形に炎え昇る　堀田　芳枝　新潟・柏崎市
二三　クラス会東京暮し押し寄せる　関谷　喜一　新潟・十日町市
二四　翻る喜怒哀楽のダイヤ婚　藤木　悌次　新潟・十日町市
二五　かたくなな心を開く言葉かけ　村山　芳司　新潟・津南町
二六　戸も窓も心もひらく句会かな　猪熊　道子　香川・坂出市
二七　まだ八十路想像の窓開けてみる　小川　弘子　新潟・三条市

二八　芸術祭観光都市への道拓く　大渕　航　新潟・小千谷市
二九　風はいにしえ胸の疼きがひらかれる　中川　峰子　香川・高松市
三十　母の文字愛が飛び出すダンボール　青山　鉄夫　長野・千曲市
三一　土器土偶明日をひらく美の世界　雨宮　源吾　山梨・昭和町
三二　土器の口ひらく装飾雪炎（ゆきほむら）　吉田　紫紅　大分・別府市
三三　旱梅雨咲けと念じる稲の花　春川　祐二　新潟・十日町市
三四　この想い伝えるために開く辞書　伊藤　昭彦　新潟・五泉市
三五　縄文史開けば密な家族愛　小田中　準一　千葉・市川市
三六　ケンカした人にも心開こうか　古賀　由美子　佐賀・唐津市
三七　女神強し天の岩戸を開けさしむ　小林　巌　新潟・十日町市
三八　青春をぶつけ開いた展示会　桑原　真琴　新潟・新潟市
三九　もみじの手乳房に温く母の幸　山田　リツ　新潟・十日町市
四十　太古よりこの地に生きて道ひらく　波形　喜利子　新潟・十日町市
四一　笹山を世界にひらくゆきほむら　廣瀬　美恵子　香川・さぬき市
四二　古代への思いをはせて笹山へ　小川　芳子　新潟・十日町市

四三　異世代の会話の扉開く孫　岩田　春代　新潟・十日町市
四四　ビッグバン開闢ありて今がある　田村　均　新潟・十日町市
四五　自粛時の愁眉をひらく空の青　川口　敬子　香川・高松市
四六　万天の星が明日の夢ひらく　松田　龍彦　岡山・岡山市
四七　縄文の文化の戦（そよ）ぐアニミズム　米倉　瞳　東京・大田区
四八　ふるさとの素顔にふれる狭い道　鈴木　良二　埼玉・上尾市
四九　開けてみる貯まった老いの知恵袋　池田　久美子　広島・東広島市
五十　口開けた後は歯科医に因われる　大塚　美沙子　新潟・五泉市

選者吟　掌をひらくと忽ち風の立ちのぼる　松田　ていこ

ジュニアの部

課　題　「みのり」　　中　沢　光　路　選

《最優秀賞》

こがねいろいなほなみうつ下校道

あべ　えい太（た）　中条小・五年

見なれた毎日の風景の中に発見があり詩が生まれます。
青々と早苗が育っていた田んぼ道が、いつの間にか実りの秋となりました。登校途中より下校の道の方が辺りに目が注がれやすいのでしょうね。課題にぴったりの良い作品になりました。

《優秀賞一》

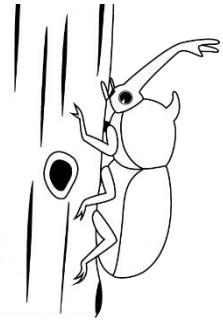
みついっぱいじゅえきがだいすきかぶとむし　　須藤　和音（おと）　中条小・一年

子供たちに大人気のかぶと虫。この頃は夏休みの昆虫採集もむずかしいようですが、それでもお父さんと朝早くからいっしょに出かけて、木のみきにかぶと虫を見つけた時の喜びはたとえようもありません。絵日記には大きなかぶと虫が描かれていることでしょう。

《優秀賞二》

オクラってみどりにひかるおほしさま　　わ田　てつたろう　中条小・二年

お母さんの料理するそばで見ていると。まな板のトントンと共に魔法のようにお星さまがいくつも生まれてくる。野菜はあんまり好きじゃなくてもこれはきっとおいしく食べられそうですね。



《優秀賞三》

夏の海水平線が光るとき　　小宮山　隼士（はやと）　下条小・六年

山国では海は憧れの的です。海水浴に連れて行ってもらったのでしょうか。それとも海が見えるところの旅行かも知れません。水平線の彼方に想いを寄せている少年の夢を追う姿が目にみえるようです。

《優秀賞四》

豪快に緑の瓜をまるかじり　　柳　空心（くうし）　吉田中・一年

みずみずしい取り立てをボリボリ食べるキュウリはすごくうまい。特に支柱やネットを手伝って汗を流しながら作ったキュウリでは特別な味もすると思います。

《優秀賞五》

丘の上夕焼け色に実る柿　　峯　悠真（ゆうま）　南中・二年

小高い向こうの丘の上に、たわわに実った柿の木がある。色づいてきてからも鳥たちのためなのか、もぎ取る様子はない。美味しそうな柿の色で、稔りの秋を見事に詠っている。

《秀　逸》

一　じじのてはやさいをそだてるまほうのて　和田　一歩（いっぽ）　中条小・四年

二　夏の空はずむタータン自己ベスト　丸山　大希（たいき）　中条小・六年

三　春風にたんぽぽわたげとんでゆく　田村　俐愛瑠（りやる）　中条中・一年

四　ひまわりとどっちが高いかせいくらべ　小林　咲（さき）　千手小・五年

五　土器たちが日本の歴史語ってる　渡邉　幸燈（ゆきと）　西小・六年

六　十五歳無限に広がる夢実る　丸山　航（わたる）　吉田中・三年

七　いちごのねたべごろあいずへたを見る　岩田　琢矢（たくや）　中条小・四年

八　発表会ドキドキドッキンがんばった　佐藤　あかり　中条小・三年

九　海の中魚のむれがおよいでる　小堺　悠人（ゆうと）　松代小・五年

十　すっぱさに脳が震えるプチトマト　米倉　望（のぞみ）　普連土学園中・三年

十一　どんぼがいて夕日はきれいでひとりじめ　金澤　結裕（ゆひろ）　水沢小・四年

十二　なつやすみぼくがとまとをとるかかり　こばしがわまひろ　中条小・一年

十三　流れ星叶うかどうか俺次第　渡邊　康介（こうすけ）　南中・三年

十四　ひまわりだ夏のかおりがしてきたぞ　尾身　芽吹（めぶき）　南中・一年

十五　空青くぽつんとうかぶ雲一つ　中町　有那（ゆうな）　下条小・六年

十六　球児たちなみだをみてるグラウンド　數藤　櫂（かい）　川西中・三年

十七　里山の木の実を揺らす春の風　大口　実優（みゆ）　中条中・一年

十八　颯爽とペダル漕ぐ足カットバン　根津　舞友里（まゆり）　南中・三年

十九　プール清掃最後はみんな水びたし　山田　優花（ゆうか）　中条小・五年

二十　七夕の笹にみのるよ願い事　柳　澪（みお）　吉田中・一年

二一　はるのかぜいちごのにおいしているよ　大くま　かお　中条小・二年

二二　実るかなスイカの種を植えてみた　藤ノ木　逢豊（あいと）　南中・二年

二三　セミたちは土の中からこんにちわ　佐藤　暢（のん）　南中・一年

二四　巨大ナスどう調理して食べようか　野上　颯吾（そうご）　吉田中・二年

二五　アジサイの花が開いてこんにちは　佐藤　楓（かえで）　千手小・五年

《佳　作》

一　おみせにねすいかがあったよなつがきた　大島　樹（いつき）　中条小・一年

二　どんぐりがぼうしかぶってかわいいね　宮内　柚杷（ゆずは）　中条小・一年

三　くわいちごことしもとりときょうそうだ　佐藤　奏介（そうすけ）　中条小・一年

四　おうおうおみのりをいのるおたけびだ　みやうち　このり　中条小・二年

五　どんぐりをひろいあつめてふゆじたく　ひ口　大と（はると）　中条小・二年

六　おちばがねぱらぱらひらりダンスする　中林　こと　中条小・二年

七　ピーマンがどんどんできてとびはねる　鈴木　麻仁（あさひと）　下条小・二年

八　どきどきがいっぱいするよ発表会　阿部　真帆（まほ）　中条小・三年

九　つなひきでいっぱいひっぱり手がいたい　清水　八千琉（やちる）　中条小・三年

十　ミニトマトこ年もあまくできるかな　なぐも　ひより　中条小・二年

十一　運動会まけても来年がんばるぞ　波形　杏樹（あんじゅ）　中条小・三年

十二　のりたいながまのほじゅうたんふわふわり　小山　ひかり　中条小・四年

十三　すずがなることしもきたなはくびしん　小橋川　琉多（りゅうた）　中条小・四年

十四　妹とじゃがいもうえたよ大きくなあれ　樋口　愛桜（まお）　中条小・四年

十五　待ち遠し実る稲穂と踊る子ら　須藤　さくら　中条小・四年

十六　ユーチューブ笑いすぎてはらいたい　上村　柚乃（ゆの）　水沢小・四年

十七　運動会空の外にもひびきます　井口　健（たける）　水沢小・四年

十八　リモートでおくれちゃったよ悲しいな　村山　美奈代（みなよ）　水沢小・四年

十九　ミニトマトさかさにしてもよく育つ　大島　杏（あんず）　中条小・五年

二十　風がふきゆらゆらゆれる金の稲穂　岡田　媛奈子（ひなこ）　中条小・五年

二一　家族との絆はずっとみのってく　窪田　暁（さとし）　千手小・五年

二二　ヒューードーン空にかがやく夏の花　小林　果穂（かほ）　千手小・五年

二三　花みのりみんなの笑顔もさきほこる　髙橋　鈴音（りお）　千手小・五年

二四　ひまわりよ天までとどけ青空へ　松山　暖（はる）　松代小・五年

二五　夏の朝ミンミンミンとセミの声　布施　心彩（こころ）　松代小・五年

二六	暑い日にえん筆カリカリ黒い文字	大津　愛葉（まなは）	中条小・六年
二七	炎天下夏のにおいがふんわりと	斎藤　美南（みな）	中条小・六年
二八	光さすプールの中はきらきらだ	加藤　虹晴（こうせい）	中条小・六年
二九	新緑とかがやく空に汗と声	高橋　音次郎（おとじろう）	中条小・六年
三十	夏の海新たな仲間と出合ったよ	井口　愛（まな）	水沢小・六年
三一	縄文人マンモスにのってかりをする	村山　夢（ゆめ）	水沢小・六年
三二	夏の日に頭がキーンかき氷	清水　心夏（ここな）	下条小・六年
三三	カレンダーめくった先にはぼくの未来	水落　隆人（りゅうと）	下条小・六年
三四	土香る野首の遺跡生きている	佐藤　夕陽（ゆうひ）	下条小・六年
三五	いやなこともみんな忘れる家族旅行	佐野　太俄（たいが）	下条小・六年
三六	たらい舟くるくる回るよどんぶらこ	大嶋　一翔（いちと）	下条小・六年
三七	勾玉を首からかけておしゃれする	根津　ひなた	西小・六年
三八	縄文土器なぞが多くて気になるよ	髙野　栞（しおり）	西小・六年

三九　花落ちてりっぱな果実実を結ぶ　宮内　安伽莉（あかり）　中条中・一年

四十　先人も実り豊かなこの地住む　和田　美優（みゆ）　中条中・一年

四一　春になる桜で埋まる空の色　和田　望（のぞむ）　中条中・一年

四二　新学年友達関係実るかな　大嶋　煌（こう）　中条中・一年

四三　実のりとは人によるもの変わるもの　佐野　按志（あんじ）　吉田中・一年

四四　お店よりばあちゃんのきゅうりおいしいな　押木　颯音（はやと）　吉田中・一年

四五　甲子園少年達の夢実る　村山　和哉（かずや）　南中・一年

四六　かき氷赤青黄色信号だ　大久保　志哉（ゆきや）　南中・一年

四七　夏休みみんなの思い出みのるかな　柳　煌々（ここ）　南中・一年

四八　強い思いいだいてきたから叶う夢　上村　七菜（なな）　南中・一年

四九　焼き肉で今期最大腹実る　相崎　基（もとい）　吉田中・二年

五十　実るかと恋愛成就期待する　春日　莉奈（りな）　吉田中・二年

五一　先実るは花か私かどちらかな　西野　真彩（さあや）　南中・二年

五二　自家せいの不ぞろい野菜名づける妹　坂本　美優（みゆ）　南中・二年

五三　宝くじ夢が実るか消え去るか　樋口　琉正（るいせい）　南中・二年

五四　実りの秋毎年鳥とかくとうだ　入田　和奏（わかな）　南中・二年

五五　夏色にそまった木々に止まるセミ　野上　蒼平（そうへい）　南中・二年

五六　筋トレでたわわに実れ俺の胸　庵原　虎男（こなん）　吉田中・三年

五七　サックスのやっと響いたいい音色　村山　奈桜（なお）　吉田中・三年

五八　ミニトマト赤くきれいにそまる夏　田口　陽向（ひなた）　南中・三年

五九　そばの花白いじゅうたんみのりかな　阿部　花梨（かりん）　南中・三年

六十　赤い実が実り小さく弾む胸　小野塚　こなつ　南中・三年

選者吟　みのりある人生などとまだ言えぬ　中沢　光路

あとがき

◆近年、大規模な自然災害が頻発している。大型台風、線状降水帯が連続して発生、接近することが多く、暴風雨などによる河川の増水、氾濫、土砂崩れなど、多発している。いったい地球はどうなったのだろう。◆コロナ禍も依然として終息を見せず、感染者は減ってはきたが、亡くなる方が後を絶たない。私たちの十日町市でも感染者が多く、その数に驚かされる。こうした中で、今年もまた表彰式など一連の行事を中止せざるをいなかった。非常に残念である。◆縄文川柳大会は、昨年から全国大会として開催しているが、今年も多くの作品が寄せられた。北は北海道から南は九州の鹿児島県の方まで、応募していただいた。ジュニアの部でも参加校が増え、全体では人数、応募句数とも新記録だった。主催者として嬉しい限りである。◆来年はいよいよ十回目を迎える。笹山遺跡の出土品が国宝指定十五周年の平成二十六年から始めた大会だが、十周年を迎えるのにふさわしい記念行事など、実行委員会でじっくり計画を立てていきたい。縄文時代の国宝は六件あるが、土器は唯一笹山だけなのだ。◆笹山の火焔型土器は、アメリカ、フランスなど外国に出展して高い評価を受けたことも一因となって、国宝の指定を受けている。この誇るべき国宝と笹山遺跡は、もっと国内外に向けて発信すべきと、その一助に始めたのである。縄文川柳全国大会の名に恥じない大会に育てていきたい。◆今回作品を寄せて頂いた全国の皆さん、児童、生徒の皆さん、そして後援団体の皆さまにも、厚くお礼を申し上げます。

実行委員会事務局長　藤木悌次記

第９回縄文川柳全国大会

主　催　縄文川柳全国大会実行委員会
中条地区振興会　中条飛渡地域協議会
十日町市中条公民館　ＮＰＯ法人笹山縄文の里
笹山縄文倶楽部

住　所　〒９４９－８６１５　☏０２５－７５２－２７４８
新潟県十日町市中条甲８２４－１　中条公民館 内

後　援　十日町市教育委員会　（一社）十日町市観光協会
十日町川柳研究社　信濃川火焔街道連携協議会
十日町市博物館友の会　新潟日報社
十日町新聞社　十日町タイムス社
（株）妻有新聞社　（株）エフエムとおかまち

誤字、脱字がありましたら謹んでお詫び申し上げます